

純美禮学園中長期経営計画「すみれ2030」			第2弾(2021年度～2025年度)総括
【将来像・教育目標】・・・「自ら考え行動し、誠実で思いやりのある生徒の育成」			滋賀短期大学附属高等学校
最重点項目(KPI)	具体的目標(数値化)		第2弾(2021年度～2025年度)検証
		～2025年度(最終年度)目標	
Ⅰ.入学定員の充足	1.入学定員 250名の確保	・専願志願者Ⅱ類:60名Ⅰ類:150名 併願志願者Ⅱ類:450名Ⅰ類:500名 特に専願志願者増に向けた個別の取り組みを強化する。	入学者は5年間で1.3倍となり、3年連続で入学定員を充足している。入学率も6.8%上昇し、専願率が確実に上がっていることを裏付けている。この間の大きな要因は、新学習指導要領の改定に伴う、コース制の導入と広く課外活動が活性化したこと、さらには就学支援金の拡充が考えられる。また、募集戦略では、従来の総志願者増に取り組む方針から、専願志願者増を優先する取り組みに転換したことも大きかった。特に小規模のオープンスクールや個別相談の機会を拡充し、丁寧に学校広報を行ったこともプラス要因に働いた。一方、直近の入試ではⅡ類の専願志願者が46名であるのに対し、Ⅰ類が215名とともとの定員差以上に差が生じた。結果、類型別の充足率から見ると、Ⅰ類のみが目標を達成した後いう点で、課題が残っている。Ⅱ類志願者増に至らなかった点について、第3弾では、2026年度から始まる修正した新たなカリキュラムや入試検討委員会で協議した入試制度の改革を含め、Ⅱ類志願者増に向けた取り組みを行うことが目標となる。一方、課外活動のすそ野が広がった要因として、特技選抜での志願者確保に力を入れたことが、年々募集活動にも好循環をもたらした。特に、今年度は大幅にこの制度の活用者を伸ばすことが出来た(前年比36名増の77名)。この特技も入試制度の見直しによる修正案を軸に、早い段階から積極的な活用に当たりたい。またこの5年の間に定着した生徒による学校広報やオープンスクールの運営も効果は大きく、この点は今後もさらに質の向上を目指したい
	Ⅱ類(90名)…専願者増加	・部活動活性化に向けての「柱」となりうる選手の勧誘、確保を目指す。昨年度並の特技入試制度活用による志願者確保に努める。(奨学生制度)	
	Ⅰ類(160名)…コース制の充実	・学習塾との連携をより強固し、Ⅱ類特待生の勧誘、確保を目指す。龍谷大、京産大等への安定した進学状況の中堅層への浸透を図る。	
	※18歳人口の減少、授業料無償化対策	・生徒と協働した広報活動を強化し、“主体性のある生徒像”をPRする。また、コースの取り組みを中心とした地域との交流を活性化し、広報につなげる。	
Ⅱ.希望を実現する進路	1. 4年制大学進学者の割合を65%超	・関関同立大合格 延べ15名以上(国公立大併せて20名以上)。	4年制への進学率は最終年度で65%超を達成(66.7%)。この間、17.7%の伸びを示した。関関同立大については目標達成年度と未達年度とがあり、安定しなかった。一方、中堅次第4校については、確実に合格者(進学者)を伸ばし、最終年度は83名となった(2021年度比3.7倍)。この点は、校内塾での指導が確立し、受験指導の方策が一定の成果を上げているとみている。今後は国公立大、難関私学校の合格者をさらに伸ばすため、校内塾の改革(受講対象者等を含む)を行っていく。これまで校内塾対応していた志望校は、校内塾に頼らない進路指導体制が出来上がってきた点を、より有機的に校内塾指導に生かしていく。また併設の滋賀短期大学への進学者数は伸び悩んだ。進路希望が4年制にシフトしている現状も鑑みつつ、高短連携を有機的に活用しながら、即戦力養成のメリットをあげて取り組みたい。
	2.進学Sクラス創設:受験機会の醸成	・龍谷大、京産大、佛教大、同志社女子大、京都女子大合格 延べ50名以上。	
	3. 校内塾の改革	・滋賀短期大学への進学者 30名以上。	
		・校内塾の志望校別対策講座のレベルアップを図る。(日程、塾内容、スタッフ、受検意識付けなど)	
Ⅲ.部活動改革	1. 強化拠点3クラブと本校強化部再編による新たな強化(魅力の創出)	・強化拠点3クラブでは、国スポで活躍できる選手を育成する。また、高校内の強化部、準強化部を中心に、活動の活性化と全国大会出場を目指す。	活動実績、入部数ともにやや低迷状況にあった2021年度から、この5年間で県内大会でベスト8以上に残る競技が増え、全国高校総体においても、連続出場がバドミントン部のみという状況から、3競技(バドミントン、卓球、陸上競技)で全国高校総体出場を果たす。同3競技で近畿大会。また、国民スポーツ大会には、バレーボール、バドミントン、陸上競技で出場。そのほか、男子硬式野球部が選抜甲子園大会出場を果たしたり、バレーボールが全国私学大会に出場、さらにこの間に創部した女子硬式野球部が全国大会にも出場するなど、実績的にも上昇機運にある。また、特技選抜入試の積極的な活用により、運動部を中心に各クラブ、部員数も増加(68.5%)し、目標まであと1歩まできている。今後は、働き方改革とのバランスも考慮しながら、運動部においては、常にベスト8～ベスト4を確保しつつ、チャンスがあれば全国が狙えるチームづくりをしていくことが、選手確保(これは募集の観点としても重要)獲得においても大切な要素である。また、部員の日常生活でも、学校を牽引するよう、集会等も行い啓発しながら、学校全体に活気がみなぎ活動を推進したい。第3弾に向けて、最終年度より強化の在り方を見直し、新たに強化部(バドミントン、女子バスケ、テニス、バレーボール)、準強化(男子硬式野球、バレーボール、男子卓球、陸上競技)を設置、また、特別クラブとして吹奏楽部、軽音楽部を位置づけ、更なる推進を目指すこととする。
	全国高校総体 2クラブ以上	・各クラブで部員を積極的に勧誘し、部員数を増やし、クラブ員を軸とした学校を動かす機運を高める。(部加入率70%超を目指す)	
	近畿大会 5クラブ以上	・強化指定はベスト4、強化推進はベスト8の結果を安定して収める。全国高総体へ3競技、近畿大会へは5競技を目標とする。	
	2. 一般生徒の模範となる部員への成長	・挨拶やリーダー性など、部員が日常生活の模範になれるよう、全クラブを挙げて取り組む。	
Ⅳ. 教育活動の推進	1. 新教育課程の振り返りと修正	・令和6年度に完成を見た新学習指導を類型、コースで振り返り、必要に応じて修正を加える。また、地域連携(交流)を系統的に拡充する。	新学習指導要領による2期生を卒業させ、カリキュラム検討委員会発足し、評価と課題を確認しながら、さらなる充実のための修正を加えることとした。より質の高い授業と進路保障とを目指す取り組みとして第3弾である2026年度より実践に移す。また、学校不適応生徒への対応と中途転学(退学)を減らすための、相談室の充実を図り(カウンセラーの増員)教育支援会議を立ち上げ、早期に対応できる体制づくりに取り組んだ結果、ここ2年、異動生徒が減りつつある状況にきている。教員負担は考慮しながら、生徒が居場所を感じられる環境づくりに努める。
	2. コース運営を行う中での課題の洗い出しとその対応	・コース行事について入念な事前準備を行うとともに、コース間のバランスも意識する。絶えず、生徒、保護者に理解を求めながら進めていく。	
	3. 新たな生徒支援(卒業率95%超)	・教育総務を中心とした、特別支援の在り方を教職員で共有し、教育支援会議、教育相談委員会をはじめ、カウンセラー、木曜相談室とも連携して、支援の必要な生徒への早期対応を心がけ、学校不適応への対策も含め、転・退学者の減少に努力する。	
Ⅴ. 職場環境の整備	1. 職員室の環境改善	・5Sの推進や昼食時のポジティブ対応に気を配り、明るい雰囲気づくりに取り組む。	学習環境を推進する上で、教職員の仕事場の環境整備は重要であり、室内の「見える化」も行い、絶えず、一定の緊張感のある空間づくりに努められた。とりわけ個人情報の管理を徹底した。また、勤務時間の管理については、不十分な点も残っているが、少しずつ意識変革が見られるようになっていく。今後、さらに業務内容と教職員数との均衡も視野に入れた改善が必要である。子の看護休暇は積極的に活用されている。教職員数については、各クラスに1名の副担任が配置できるような体制づくりを行いたい。
	2.有休取得、振休取得	・休暇は学年や分掌子毎に年間を通じて計画的に取得するよう啓発する。また、取得時期等で、業務に支障がでないよう対応する。	
	3. 効率的な業務分担	・学年、分掌、教科等でそれぞれの抱える仕事量を俯瞰し、全体として仕事がシェアできる環境作りに取り組む。	
	4.積極的な人材登用	・次年度に向けた積極的な採用活動を行う。	
Ⅵ その他	1.「18歳＝成人」への対応	・「間バイト」等が社会問題化する中、SNSの利用も含めた、社会人としての心構えを、講演会や特別活動等の時間を使い、啓発する。	新成人への対応として、教職員への研修を実施し、新3年生を対象にした研修も活用したが、青少年に対して年々巧妙化、粗雑化する犯罪誘導への警鐘をどのようにしていくかはまだまだ課題が残っている。保護者への協力も含めた対応が必要になる。生徒、保護者への対応については、コンプライアンスの視点からも研修を積み、丁寧な対応を心がけている。感情的にならない対応を継続していく。また、読書啓発は、学校評価でも経年、課題となっていた。2022年度からは教職員が「私の勧めるこの1冊」を紹介するなど、生徒が書物を身近に感じ入られるような取り組みを継続している。さらに、図書室のイベント企画を通して、まず図書室に気軽に足を運べるよう工夫をしている。活字離れがいわれる現代、言葉の大切さを、思考することの大切さを書籍を通して伝えられる取り組みを模索している。
	2. 生徒、保護者への丁寧な対応	・言葉遣いも含め、わかりやすい説明を心がける。個々に簡潔明瞭で丁寧な対応を実施する。	
	3 読書啓発	・読書への取り組みをさらに積極的に推進する。図書館との連携、担任のこだわりを強化する。	